

高山俊昭先生のご逝去を悼む

佐藤時幸



日本古生物学会名誉会員の高山俊昭先生は、病氣療養中のところ2019年8月1日にご逝去されました。享年83歳でした。

私が最後に先生にお目にかかったのは、今年5月に先生のお宅へお伺いした時でした。先生はとてもお元気そうで、同席した奥様やお嬢様とともに昔話が花が咲きました。とくに、今話題の新第三紀／第四紀境界やチバニアンのお話では、大きな声で話をされ、楽しい時間を過ごすことができました。奥様から訃報の知らせを受け取った時には、あまりにも突然のことで、すぐには信じることができないほどでした。

高山俊昭先生は、昭和11年（1936年）福島県にお生まれになり、昭和36年（1961年）3月東北大学理学部地学科を卒業、同38年（1963年）3月同大学大学院理学研究科修士課程地学専攻修了後、昭和39年（1964年）からウィーン大学に留学しております。留学から帰国後の同41年（1966年）6月同大学大学院理学研究科博士課程地学専攻を退学し同大学理学部助手に採用されました。その後、同51年（1976年）4月金沢大学教養部助教授、同55年（1980年）7月同大学教養部教授を経て、平成8年（1996年）4月同大学理学部教授に就任、同10年（1998年）3月退職されました。この間、平成5年4月から平成7年3月まで金沢大学教養部長として管理運営に御尽力されました。金沢大学ご退職後は十文字学園女子大学社会情報学部教授として学生の指導にあたり、数多くの教え子を社会に送り出しております。先生は教育に対して常に深い情熱を持ってあたり、教養教育、専門教育のあり方を探求して教育の質向上に努められました。先生のこのような優しさにあふれるお人柄は、学生をはじめ先生の回りにいつも多くの方達が集う笑いの絶えない研究室であったことから窺えることでした。先生のこのようなお人柄もあり、ご葬儀当日には多くの方達が参列

され、先生をお見送りされました。

先生のご専門は、ウィーン大学留学中にストラドナー博士に師事し学ばれた石灰質ナノ化石の研究でした。帰国後は我が国におけるこの分野のパイオニアとして活躍されました。ウィーン留学中の様々な出来事は先生の著書「ウィーンによろしく」に詳細に書かれていますので省きますが、私たちが先生から良く聞かされ、そして著書の中でも触れられている東北大学の半沢先生とオーストリア地質調査所長のキュッペル所長との話は大変興味深いものでした。キュッペル博士は第二次世界大戦当時、オランダの石油会社の技師としてインドネシアに派遣されたが、日本軍の捕虜となってしまう、しかし、日本軍の一員としてインドネシアに派遣されていた半沢先生がキュッペル博士をインドネシアで厚遇したとのこと。戦後、キュッペル博士は半沢先生へ感謝し、その後も交流を続けていた中、ウィーン大学留学プロジェクトへの高山先生の応募があり、その選考にキュッペル所長の強い意向が働いたとのことでした。高山先生はこのキュッペル先生と半沢先生のお話を「うれしい、うれしい倍返し」という表題で著書の中で紹介し、ご自身がウィーン留学を実現できたのが、半沢先生とキュッペル先生の友情にあったことを述べています。同様に、先生の「研究に没頭するあまり建物の中に閉じ込められた」のような留学中のエピソードは、同じく先生の著書に触れています。

先生は、石灰質ナノ化石に関する多くの研究成果を国内外に発表されました。とくに、先生の研究対象は上部新生界についての層序を論じたものが多数でした。これは、1950年代後半に端を発した第四紀の始まりに関する議論が原因であったと伺いました。すなわち、1948年の第18回IGCでは、第四紀の模式地をイタリアのle Castellaに置くこと、下位との境界は寒冷化で特徴付けられることが訓告されています。これを受けて日本では浅野先生を中心に有孔虫化石調査から「梅ヶ瀬説」が発表され大きな議論となりました。その後、化石層序のみならず残留磁気の測定などに基づいた研究などが次々に発表されました。高山先生のウィーン大学への留学は、石灰質ナノ化石から本邦の第四系の研究を進め、第四紀境界問題に関する決着をつけよう、という背景があったようだと先生はおっしゃられていました。そのようなこともあり、先生が1969年に最初に発表された石灰質ナノ化石研究論文は、房総半島および銚子地域の最上部新第三系から第四系に関するもので、ウィーン大学留学中に執筆したものでした。その際、*Discolithina japonica*を新種として記載されております。1970年発表の西太平洋で採取されたラモントコアと南イタリアのle Castellaセクションとの比較研究は、*Discoaster*の絶滅が模式地le Castellaのカラブリアン基底付近にあることを初めて明確にした

もので、この鮮新統／更新統境界に関する重要な研究成果は、石灰質ナノ化石層序のみならず、微化石層位学研究における同境界の議論に大きな影響を与えました。

その後、1977年に本邦の最上部新生界の地質年代に関する研究成果をまとめた後、1983年には北大西洋を対象とした深海掘削計画DSDP Leg94に参加されました。この航海では、第四系を連続したコアで採取することに成功、残留磁気測定結果も明確にされ、第一級の研究試料の採取に成功しました。先生は多数の研究試料を持ち帰り、私を分担研究者に加えて石灰質ナノ化石層序の解明を進められました。先生と私は、試料の質の良さとも相まって、毎日遅くまで顕微鏡観察を続けた結果、先生は「座骨神経痛」を、私は「指向性筋肉炎」を発症し、顕微鏡を観察する姿勢が取れなくなるほどになりました。そのため、二人とも病院通いを続け、満身創痍での研究となりました。その結果、過去200万年間に12の石灰質ナノ化石対比基準面が引かれること、これにより（当時の定義の）第四紀を詳細に区分できることを発見し、成果を世界に発信しました。その後、これらの成果はイタリアのジェラシアン～カラブリアン模式地を手始めに、本邦の第四系に広く応用され、第四紀地質年代層序対比が大きく改定されることとなりました。先生のこのような一連の研究成果は、油田構造発達史の解明にも大きく寄与したことから、石油技術協会から業績賞を授与されています。このように、先生のウィーン大学への留学以降に発表された多くの研究成果は、現在話題となっているGSSPの問題とも共通する先駆的な研究であり、その基盤を確立させたとも言えるでしょう。

石灰質ナノ化石研究で多くの成果を発表された先生は、音楽や絵画にも造詣が深い教養あふれる先生であることでも知られていました。それは千田日記（せんだ につき；「チター弾き」を語源）のペンネームで出版された音楽に関する多くの著書、自宅の地下室にある防音装置を備えたオーディオルームと数多くのレコード、CDなどからもうかがえます。先生がウィーンから持ち帰られたキンドル制作の弦楽器、チターを演奏される話は仲間内では有名なことでした。また、かつては「カラオケ」がお嫌いであった先生は、ある時期からマイクを握って離さなくなり、私の学生とカラオケ店に行った際には、東海林太郎からパフィー、AKB48までを熱唱されておりました。このような世代を超えた様々な歌に精通する先生に、学生たちは心底驚き、そして先生を熱烈に歓迎するのが例年の行事でした。

高山先生は、金沢大学の教養部におられたときに「弟子を育てることができない」、とこぼしておられました。しかし、未だ先生を追い越すことはできないものの、国内外に多くの弟子、孫弟子たちが育っています。最上部新生界石灰質ナノ化石層序研究に生涯を捧げ、音楽や美術に精通し、そしてウィーンをこよなく愛しておられた高山先生。まだまだ先生から教わるべき多くのことがあっただけに、この度のご逝去はただただ残念でなりません。

これまで賜った多くのご指導に深く感謝するとともに、高山俊昭先生のご冥福をお祈り申し上げます。

合掌

